た、やがて魚腹に葬られんと思つた乘組は、其の半死半生に疲勞し切つた身體を一人々々端艇に運ばれて、此處に危ふかりし王緒を繫ぎ止めた、其の間纖弱き二本の手で、幾多の人々が生命を載せて運ぶべき端艇を、逆卷く浪に浚はれじ、鋭き岩角に碎くまじと、必死に働らいた少女が苦心は如何なであつたらう。

全員悉く救はれたりと見た父は再び端艇に飛び乘つた、鐵の如き腕と、眞白き腕とに橈は操られ、浪を潛つて端艇は辛くも燈臺に安着した。

水夫となりて勇敢であつたグレースは、岸に上るやいな介抱人となつて眞情溢るゝが如き親切を現はした、彼女が此の優しい眞心は、さしも狂暴を盡した嵐がやんで、難破者一同が元の健康に復した後、各々家路に向ひ得る迄續いたのである。

以上の話は既に遠き昔のことゝなつた、然れどもグレース・ダーリングの名は永遠に忘らるゝことはあるまい、彼女の死骸は昔の家のあつた所より遠からぬ海に近き一小墓地に葬られて、年々に來る彼女の忌日には、其の墓を訪ふ人も少なく



ないのである、墓には勇敢なる少女が名譽を表頌せんが爲め一個の石碑が建つてゐる、其の石碑は無論大きくはないが、グレース・ダーリングをして今日迄も名あらしむる、當年の氣高い行爲をあり〳〵と囁いてゐる、それも無理はない、其の石碑とは一少女が右手に緊と端艇の橈を握りながら、横たはつてゐる姿が刻んであるのだもの。

## ウ井リアム・テルの話

遠き昔より瑞西の國民は、必ずしも今日の如く自由を喜ぶ幸福な國民であつたとは言へぬ、餘程以前の事である、此の國にゲッスラーなる豪慢不遜な暴君があつて、民を虐げ苦めること甚しく、彼等をして堪え切れぬ運命の下に泣かしめた。

或日此の暴君は、大道の四辻に長い棒を立てさせ、其の端に自分の帽子を引掛けて、此處を通る人は何人であれ、必らず其の帽子に敬禮を施さねばならぬと命令し

て、其處に兵士を立たしめて番をさせた、然しウキリアム・テルなる人があつて、此の馬鹿らしい命令に服從しなかつた、彼は腕組をした儘反身になつて立止り、竿の端に搖れてゐる帽子を見て呵々と笑ひ、例令ゲッスラー王其の人があても、敬禮を施さうなどゝは思はなんだのである。

番兵の注進にゲッスラー王は火の如く怒つた、此奴一人を助けおく時は、やがて自分の命に背く者も出來、終には一國を擧げて反逆を謀るやうな事があつては、由々しき一大事なりと恐れたので、此の大膽不敵の一勇者を嚴罰しようと決心した。

ウヰリアム・テルは山中に住む名ある獵師である、弓矢の道にかけては瑞西の國必ずしも廣くはないが、彼の右に出る程の者は一人もなかつた、ゲッスラー王も元よりテルが手練の程を聞知つて居る、故に獵師の弓矢が却つて自分を非運に陷らすような酷い計略を考へた、で、王はテルの愛憐き幼兒を四辻に立だせ、其の頭の上に林檎を乘せさせ、テルに一矢で果物を射落せと命じた。



流石の勇士も、自分の身は如何に試みらるゝとも覺悟の前である、けれど一つ狙ひが外れたら罪もない我が子を殺さねばならぬので、仰ぎ願はくば他に自分の技倆を驗す仕方もあるにと只管王に悃願した、若し我が子が身動きしたら如何しやう、若し右の手が震へたら如何しやう、若し矢が逸れたら如何しやうと、勇士の腸も今や寸斷されるやうである。

『國王、拙者に我が子を殺せと仰せあるか。』

とテルは血走る眼に王を儼と瞋んで、最後の問ひをかけた。

『聞く耳持たぬ！』

とゲッスラー王は冷然として、

『手前は如何しても一矢で林檎を射落さねばならぬのぢや、若し手前が射損じたら最後、朕が兵士は手前の面前で、彼の子供は見事に殺して呉れるぞ。』

テルは木石の如き暴君に最早問答無益と思つたので、彼は弓に矢を番へて觀念の

眼を睜り、一心不亂に狙ひを定めた、南無弓矢の神加護あらせ給へ、我が子の生命助け給へ、と彼方を見れば、愛子は石像の如く神色自若として立つてゐる、彼の顏には何等の恐怖の色がない、彼は子供ながらも父の技倆に對して、動かし難い自信を持つてゐたからである。

やがて弓弦を放れたテルが矢は、流星の如く空を切つてヒューと鳴り、見事林檎の眞中を貫いて射落した、天にでも登るやうに喜んだのはテル一人でない、父子の運命を危ぶみつゝ固唾を呑んで見物してゐた人々は、我を忘れて思はず歡喜の叫びを揚げたのである。

テルが悠然と其の場を引去らんとした時、上衣の裡に密に隱し持つてゐた矢が地に落ちた、目聰くも看出たる王は憤然として、

『こら待て、其の第二の矢は如何する積りぢや。』

『暴君！』



とテルは豪然として、

『拙者の武運拙くして愛子を傷付けたる節は、汝の胸を射貫かんが爲め携へたる矢だ。』

尙ほ一つ物語が殘つてゐる、此の事があつてから餘り後の事でない、テルは彼の外套の裡から落した一筋の矢で王を射殺し、暴虐と壓政に苦しむ彼の國に自由を喜ばしめた。

## アーノルド・ウインケルリード

雲霞の如き大軍が、今や瑞西の國に推寄せて來た、今にして之を禦ぎ止めなんだなら、再び敵を國境外に追拂ふことの不可能なのみでなく、容赦もなく市は燒かれ、百姓の穀物や羊は思ふ存分に掠められ、民は生擒られて奴隸にされてしまふであらう。

瑞典の人々は總て此の事に氣が付いたので、彼等は今や自分等の國家と生命との安全を計る爲めに戰はねばならぬ、で、勇敢なる人々は山を越え谷を渡つてやつて來た、或者は弓矢を手にして來た、或者は大鎌や熊手を携へて來た、或者は唯杖や棍棒のみを持つて來た。

然し彼等の大敵は、道路に沿うて正々堂々の陣列を作つて推寄せて來る、そして兵士は各々精鋭な武器で固められてゐる、其の動くや一規律の下に列も亂さず、唯鎗や、楯や、其の他の武器が閃々と人の眼を眩ますのみである、兩軍の形勢既に此くの如し、哀れな瑞典の國民は武器に乏しい烏合の衆を以て、多年鍛練せられた精兵に對せねばならぬ、螳螂の龍車にむかふとは這麼のを言ふのであらうか。

『我々は敵の陣列を破らにやならぬ、』

と瑞典軍の指揮官は聲を勵して、

『彼等が密集してる間は手の下しやうがないぞ。』



指揮官の聲に應じて弓を持つた者は矢を切つて放した、けれども皆敵の楯の爲めに妨げられて逸れてしまう、或者は棍棒を振舞はし石を飛ばして試みたが何等の効力はない、敵は依然として正々堂々の隊伍を組み、ぢり〳〵と此方に動いて來る、彼等の楯は層々重なり合ひ、幾千の鎗は照る日に輝く剛毛の如く見えた、兒戯に等しい杖や石や獵師の矢などが敵の眼中にあらうか。

『今にして敵の陣列を亂すことが出來なくば、我々は戰爭の機を失ふのみでなく、國家は敵の手に歸してしまはう。』

と瑞典人は絶叫した。

此の時服裝賤しきアーノルド・ウインケルリードは進み出で、

『彼方に聳えてゐる山の向側には、俺の樂しい家庭がある、俺の妻も子供も歸りを待つてゐる、然し愛憐の彼等は再び俺を見ることは出來なからう、俺は今日國の爲めに生命を捨てるつもりだ、我が同胞よ、諸君も亦生命を亡きものとして諸君

の義務を盡し給へ、そして瑞典の國を自由ならしめ給へ。』

言ふより早く彼は敵陣目掛けて躍入りつゝ、

『我れに續け、必らず敵の陣列を破つて、諸君が思ふ存分勇敢に戰はしめん。』

と叫んで縱横無礙に突進んだ。

彼の手には棍棒も、石も、其の他の武器も何一つ持たなんだ、けれど彼は慮することなく夏尙ほ寒き鎗の穗先の簇る中へと突進した。

『我が行手を開け。』

と敵の陣列に割つて入り、多勢を賴んで我れ一番に仕止めんと向けられた鎗先を物ともせず、凄じい勢ひで進みに進んだ、大膽不敵の一勇士が振舞に舌を捲いた敵兵等は、思はず我れを忘れて崩れ出した、敵陣亂れたりと見た瑞典人は勇氣百倍し、アーノルドの後に續いて驀直に進入り、手にせる武器を振つて奮戰苦鬪した、彼等は敵の鎗を奪ひ、楯を踏躙つて雲霞の如き敵兵を恐れなかつた、彼等が只管に懷か



しき家庭と床しき故郷を思ふ一念は、さしもに强き敵兵を追退けて勝利を自分等の手に歸した。

此くの如く規律と武器とを缺いた寡兵を以て、鍛錬と精鋭の武器とを有する大軍を敗つた戰爭は、嘗て何人も以前に知らなんだのである、然れども瑞典の國土は救はれて平和と自由とを得た、アーノルド・ウインケルリード の死は犬死ではなかつた。

## アトリーの鐘

アトリーとは伊太利の或る嶮しい山の山腹にあつた、非常に古い一小都市の名なのである。

今は昔アトリーの王は、美しい大鐘を購ひ求めて市場に吊さし、殆んど地に達しさうな長い紐を鐘に結びつけさせたので、如何な小さい子供でも其の紐を引いて鐘

を鳴らすことが出來た。

『是を正義の鐘と名づく。』

と王は言つた。

美しい大鐘の据付けが出來上つた時、アトリーの市民は一日業を休んで之を祝福し、貴賤老幼の別なく悉く市場に來り集まつて正義の鐘を見た、鐘は善盡し美盡し輝る日の如く金色の光を放つ迄に磨かれて人々の眼を射た。

『こんな美しい鐘は如何なに善い音がするだらう。』

市民は等しく驚嘆の目を睜つた、

時に王は徐々と此場に臨御した。

『今に見よ、多分王樣がお鳴らしになるから、』

と市民は襟を合せ行儀を正して肅然と立ち、王の如何に爲し給ふやを待構ねてゐた。



けれど、やがて鐘樓に立つた王は鐘を鳴らさなかつた、吊り下げられた紐にだも手を觸れなかつた、唯矗と立つた儘片手を上げ、

『我が民よ！　汝等は此の美しき鐘を見るならん、これ朕の鐘にあらずして汝等の鐘なり、然しながら要なくして徒らに鳴らす勿れ、時ありて汝等中の或者他より不正を受けたる際は、直ちに來りて此の鐘を鳴らす可し、さすれば法官立所に集まり來りて其の訴訟を聽き、而して公平なる審判を下さん、富みたる者、貧しき者、老いたる者、若き者、等しく來つて鐘を鳴らす事を得、然れども未だ他より不正を受けざる者、此處に來つて紐にだも觸るゝを許さず。』

星移り物變はりて幾多の歳月を經た、正義の鐘は幾度も鳴りて幾度も法官を集めた、多くの不義罪惡は正され、多くの惡漢は罰せられた、終には吊下げてあつた麻の太繩は殆んど擦切れさうになり、下の方は縒が解けて切れた部分もあり、今では只脊高の人でなくては手の屆かぬ程短かくなつてしまつた。

法官は或日言つた。

『これでは何の役にも立たん、若し子供が他から不正を受けて我々を呼ばうとする際は、何とも鐘の鳴らしやうがない。』

法官は早速市民に、如何な小さな子供でも容易く鐘の鳴らせるやうに、地面まで届く紐を新調して結んでおけと命じたが、生憎アトリーの市中を捜しても什麼長い紐がなかつたので、これを求めやうとするには山を越えて買ひに行かねばならぬ、それには幾等急いでも數日を要する、其の間に大犯罪事件でも起つたら如何するか、他から害を受けた民が紐に手が届かんので其儘にしておいたら、如何して法官達の耳に入ることが出來やうか？

『手前に宜い考へがありますと』

と法官連が途方に迷つて相談してゐた傍に立つてゐた男が突然言つた。

其の男は早速程近い菜園に駈けて行き、間もなく長い葡萄の蔓を持つて來て



『これが紐の代はりになります。』

と言ふより早く攀ぢ上つて鐘に結び着けた、美しい金色の鐘の下から、葉や卷鬚が其の儘にある細長い葡萄の蔓紐は地上に尾を曳いた。

『うむ、これは良い紐だ、其の儘に吊下げておけ。』

と法官等は其處を去つた。

扨、アトリーに程近い村の丘坂に、若い頃は隨分と諸國を乘り廻し、幾多の戰場にも臨んで武勇の程を人にも知られたが、今は寄る年波に閑散な餘生を送る人が住んでゐた、こんな武事一方の素性の人であつたので、明けても暮れても馬――主人を幾度も險難から救つた天晴な名馬であつた――ばかりを優奴々々と唯一の友として愛で慈んでゐた。

然し此の清廉潔白の老武士も、追々と齡を重ねるに從つて體力は減る、起居は不精になつて來る、戰場を縱横に駈け廻つた事や、華々しい武功を爲した事などは、

自分ながらも遠い昔の物語でも聞くやうな氣になり、武士氣質とでも言ふべきものは、淡い夢のやうに消えて自分とは日に〳〵縁が薄くなる、隨つて追々募つて來るのは貪慾ばかりで、一も金、二も金、其の外は何事をも思はぬ迄のぼりつめて、彼は見事に吝嗇漢となつてしまつた、斯うなつては、昔の甲冑や劍を始め何の役にも立たぬ物は、賣り拂つて金を拵へるのが上分別と、馬を除くの外家中の道具類を悉皆賣つて財布の腹を脹ませ、家作も廣くては無駄な費用が要ると、丘阪に小さな小屋を建て、移り住んだ、そして毎日自分の傍に財布を置き、如何したら此の上金儲けが出來るかと慾ばかり日增しに根を張つて來て、不憫や昔忠義を盡した馬は屋根、もない厩に繫がれて餓に泣き寒さに慄ねてゐた。

『彼の役にも立たん懶惰馬を、何時迄飼つてゐたとて金儲けになるぢやなし、』

と或朝吝嗇漢は自問自答して、

『一週間彼奴を飼つておく秣の直の方が、彼奴を今賣る直より餘程かゝる、這麼



馬鹿らしい事が又と世にあるものか、一層彼奴を賣らふかしら、然しあんな馬を誰が買ふものか、と言つて人に遣るのは尙ほ無駄だし、彼奴自身如何とも爲るやうに厩から追放してやらう、多分路傍の草でも喰つてゐるだらう、それとも飢えて死んでしまへば、尙更面倒がなくて結構だが。』

貪慾無慙な主人に見捨てられた哀れな老家畜は、禿山の中腹から嶮しい岩の間を草でも見付けて喫へと追拂はれた、跛で病ある彼は塵だらけの道を當所もなく悄々と彷徨き、少しばかりの雜草や薊の葉に饑い腹を兎も角も肥やした、其邊に遊んでゐる子供等は面白半分に石を投げる、野良犬は嚙みつくやうに吠ゑる、不憫な彼を哀み勞はる者は一人もなかつた。

焦げつくやうな夏の午後である、愍然な馬は食を得られぬ苦しさに、眞晝の酷熱に全身を曝しながら市場へ重い足を引摺つて來た、往來は暑さに恐れて一人の通行者もない。

市場の門も廣く開放してある、饑餓と疲勞との他に何の考へもない家畜は、ふら〳〵と思ふが儘に行くと、正義の鐘に吊下げてある葡萄の蔓が不圖目に入つた、蔓は未だ市民が下げてから時が經たぬので、葉も卷鬚も水氣だつて乾萎もせず、綠の色も鮮に生々としてゐた、飢ゐたる馬の身には如何な御馳走であつたらう！

馬は痩せ細つた首を伸して一枚の葡萄の葉を啣へたが、疲れた彼には蔓から離すのが難儀だつたので一つ引張つて見ると、忽ち頭の上で無明の闇を破るが如き鐘の音、下では瀕りに蔓を引張る、上ではアトリーの全市へ響けと又もや喧噪い鐘の音。

晝寢の夢を醒まされた法官等は、急ぎ禮服に着換ゐて憖られるやうに熱い町を汗を拭き〳〵駈けつける、途々此の苦しい眞晝間に、誰が鐘を鳴らすのであらう、如何な大事件が湧いたのであらうと、倉皇と市場の門を潜つて見ると、これは又意外！痩せた老耄馬が葡萄の蔓を懸命に嚙つてゐるのを見やうとは。

『何の事だ！』



と法官の一人は呆然として、

『此奴は彼の吝嗇漢の馬だ、誰一人知らぬ者もない事だが、主人が餘り殘酷にするもんだから、先生裁判を求めに御座つたのだ。』

『物の言へぬ畜生にしては、なか〳〵巧妙な手段で事件を訴へなさるわい、』

と他の法官が言つた。

『兎も角も判決を下してやらうではないか。』

と第三の法官が言つた。

彼此する內にアトリー市の男も女も子供も、此の夏の炎天盛りに法官達が鐘樓に集つたのは、如何な大事件を裁判するのであらうかと、好奇心に驅られて市場迄やつて來て見ると、原告の姿はなくて只馬がゐるのみなので、少なからず奇異の感に打たれて立つてゐたが、少時して事の眞相を知つた時、此の馬ならば、彼の吝嗇な主人が小舍の中で財布の勘定に餘念のない間、秣も宛はれず世話もされず、小山の

四邊を悄々歩いてゐたのを見たことがあると、聞かれたら誰でも答へられぬ者はなかつた。

『誰れでも行つて、此處へ彼の吝嗇漢を伴れて來て呉れ。』

と法官達は頼んだ。

間もなく老武士が怪訝な顔をして伴れられて來た時、法官等は彼れに直立して次の判決を聞けと命じた。

『此の馬は、多年の間骨身を惜まず汝に能く仕へたるものなり。彼は幾多の險難を冒して汝を救ひたるのみならず、又汝の富を得るに助けとなりたること少しとせず、かるが故に本官等は汝をして其の財産の一半を割き、彼の爲めに庇護を設け飼料を購ひ、彼を牧養し得る綠草に富む牧場を與へ、彼の晩年を慰むべき廐を築かんが爲めの資に供せんことを命ずるものなり。』

吝嗇漢は頭を垂れて太息を吐き、彼の財産が少なからず減るのを悲しんだ、けれ



ど最前から判決を聞いてゐた多くの市民は、歡喜の聲を揚げて叫んだ、瘦馬は直ちに新しい廐に伴れて行かれ、此の年頃味はつた事のない旨い御馳走に有付いた。

## 如何にしてナポレオンはアルプス山を越えたか

今から雜と百年前、ナポレオン・ボナパートといふ大英雄があつて、時の佛蘭西軍の指揮官であつた、當時佛蘭西は其の周圍の殆んど總べての國々と干戈を交ゐてゐた、彼は自分の部下を伊太利に引卒して行かふと思つたが、佛蘭西と伊太利との國境には、アルプス山といふ高く天に聳ゐた山があつて、其の頂は白雪を以て覆はれてゐるのである。

『アルプス山が越されるだらうか？』

とナポレオンは部下に尋ねた。

『アルプス山越への視察として派遣されてゐた部下は皆頭を左右に振つた、然し其の内の一人が、

『それは越えられも致しませうが、然し……。』

『それ以上聞く必要はない、』

とナポレオンは凛として、

『伊太利に進め！』

國民は道もないアルプス山の險を冒して越す六十萬人の軍隊の無法を冷笑した、然しナポレオンは唯萬事の整頓に少時を待つたのみで、直ちに進軍の命を下したのである。

軍隊、馬匹、大砲の長き列は二十哩の延長に亘つた、軍隊が最早此の先一歩も進むべき道のないやうな險阻に差掛つた時、喇叭は瀕りに進軍の符を吹奏された、これに勵まされて人々は悉く力の有らん限りを盡し、全軍は徐々として眞直に動き出



した。

間もなく軍隊は安全にアルプス山の險を越え、後四日を經て伊太利の平原を踏むことを得た。

『一度勝たんと心に期したる男子は、決して「不可能」なる一語を吐かざるべし。』

とナポレオンは言つた。

## シンシンナタスの話

羅馬の市から程近い小さな農園に、嘗てシンシンナタスといふ人があつた、彼は一度は富み榮えて、其の國の最上の官職にも就いてゐた事もあつたが、如何した譯か財産を悉皆無くしてしまひ、今では畑へ出て自分に鋤鍬を握らねばならぬ程貧乏になつた、けれど當時は耕作の業が決して賤しくない、寧ろ高尚な仕事のやうに考へられてゐた。

シンシンナタスは多くの人から信用を受け、彼の忠告は喜んで人々に容れられる程、賢明なるが上に正義を重んずる人であつた、で、誰でも何か思案に餘る事があつて、如何して可いか自分で自分が分らない時には、彼の近隣の人は判にでも捺したやうに吃度、

『シンシンナタスの處へ行つて御相談なさい、彼の人なら善い智惠を借して呉れませう。』

と慰めるのであつた。

扨、當時羅馬の市から遠くない山中に、殘忍兇暴な殆んど野蠻に近い一種族が住んでゐて、絶ねず羅馬人と干戈を交ねてゐた、彼等は自分等の味方に他の好戰の一種族を説伏せて人數を增し、到る處で掠奪したり强盜を働らきながら羅馬の市へ推寄せて來た、彼等は羅馬の外壁を悉く蹂躙し、全市を燒き拂つて男は殘らず殺戮し、女や子供は生擒つて奴隷にしてやると大言した。



大層自負心に富んだ上に勇敢な羅馬人は、最初の内は餘り危險なとも思はなかつた、と言ふのは、羅馬に於て男子と生れたものは悉く軍人である、野蠻未開の種族の奴等を征服せんが爲めに出て行つた軍隊は、世界に於ける最も精鋭を盡した優れたものだと信じてゐたからである、市中に女子供と止まつたのは、市の立法者で白髮の元老院議官の外は、外壁守備の役目に當つた少數の兵士のみであつたが、それでも是等の連中は、山から出て來た盜賊共を此處から追拂ふのは、何でもない容易い事だと考へてゐた。

けれど或朝のことである、蠻族征伐に趣いた五人の騎馬武者が、山から驀地に駈け下りて疾風の如く走つて來た、見れば人も馬も塵だらけで血汐が滴つてゐる、外壁の門を守備してゐた兵士は元より五人が味方な事は知つてゐる、で、彼等が馬を一目散に門内に躍入れんとした時聲を限りに叫んだ、何故什麼に泡を喰つて駈けて來たのだい！　味方の軍隊に何事か起つたのかい！

塵と血に塗れた五人の騎馬武者は兵士の問ひに耳を傾けず、直ちに市に入つて火の消えたやうに淋しい町々を通つて尙ほも駈けた、人々は空漠を破る喧噪い蹄の音に吃驚し、如何なる一大變事が起つたかを知らうと思ひ、五人の後を跟けて走り出した、當時の羅馬は大きな市でなかつたので、騎馬武者等は間もなく白髮の元老院議官等が集まつてゐる市場に着し、ひらりと鞍から下りて物語つた。

『たつた昨日の事で御座ります、我が軍隊は險しき山間の狹い谷間を進軍しました時、突然千人ばかりの蠻族共が、我が軍隊の前方及び上方の岩間から飛出して來まして、軍の進路を塞いでしまひました、通路は狹くて到底戰鬪線を張る譯にまゐりませんので、一度退却するの止むを得ざる場合となりましたところ、敵は又此の方の道も塞いでしまひました、事茲に至つて我が軍隊は兇暴なる敵に前後より挾擊され、山上より雨霰と投げ落す岩石を頭上に受けねばならぬ羽目となりました、軍は即ち敵の罠に落ちたので御座ります、我等十人は早速急を報知せんと思ひ、馬に拍車を當てゝ一目散に駈け出し、我々五人は無二無三に道を通り拔けてまゐりましたが、他の五人の戰友は蠻族共が無慙の鎗先に貫かれて斃れました、嗚呼、大羅馬の元老院議官閣下！　寸時も早く我が軍隊を救はんが爲めに援兵を送られたし、それでなければ我が軍隊は全滅の非運に遭ひ、此の羅馬の市も敵の手に歸してしまひませう。』



『如何したものだらう？』

と白髮の元老院議官等は少なからず途方に迷つて、

『今市に居殘る者は番兵や子供ばかりだが、其の内からでも送らにやならぬだらうか？充分兵士の指揮が出來、此の危殆に臨んだ羅馬を救ふ程な賢人は誰であらう？』

其場にゐた總ての人は戰慄し、額に非常な沈痛の色を顯した、何故なれば最早一縷の希望もないやうに思はれたからである、時に一人が思ひ出したやうに、

『シンシンナタスを送れ、彼の人なら我々を救ふであらふ。』

シンシンナタスは時に畑を耕やしてゐたが、迎ひに來た人々が大急ぎでやつて來た時、彼は仕事の手を止めて慇懃に挨拶し、相手の話すのを待つてゐた。

『シンシンナタスさん、先づ外套を召して下さい、』

と彼等は眞面目になつて、

『扨、何卒羅馬全市民の聲をお聞き下さい。』

シンシンナタスには人々の言葉が何の意味か少しも分らない。

『羅馬では何も事は御座いませんか、』

と頓珍漢に尋ねて、そうして妻に外套を持つて來て呉れと頼んだ。

妻が外套を持つて來ると、シンシンナタスは身體の塵を拂つて其を着た、そこで人々は使命を語つた。

人々は羅馬軍が山道で敵の罠にかゝつて窮境に陷つたことゝ、隨つて羅馬の市が



累卵の危きに頻してゐることを手短かに話し、

『羅馬全市民は貴下の御意の儘に主宰の下に立ち、市の統治をもお願ひ致したき希望に御座ります、且つ元老院議官の方々も速刻貴下にお出でを乞ひ、直ちに山へ御出馬を願つて、頑强なる蠻族討伐を貴下にお頼みせんと望んでゐられます。』

シンシンナタスは聞くより早く其處に鋤を投げ捨てゝ市へと急いだ、彼が町々を通りながら市民の方に爲すべき義務を命じた時には、彼等の或者は戰慄して怖ぢ恐れた、何故なれば彼は好むが儘に全羅馬を支配する權を握つてゐるのを知つてゐるからである、けれどシンシンナタスは危急の秋に際して、二三恐怖者の愁訴に耳を借すが如き人でない、直ちに番兵や子供にも甲斐々々しく武裝せしめ、兇暴無慙な蠻族共と戰つて、罠に陷つて全滅しかゝつてゐる味方を救はんが爲め、自分が眞先に立つて勇ましく出陣した。

二三日後にシンシンナタスから好報が來て、羅馬の全市には鼎の沸くが如き歡喜

の聲が揚つた、即ち蠻族共は非常な大打擊を受けて軍を敗られ、山奥深く散々の爲體で逃げ去つたとの好報である。

而して今や羅馬の軍隊は番兵や子供と共に、軍旗を飜へし凱旋を歡呼しながら、意氣揚々として引上げて來た、そして其の先頭にはシンシンナタスが馬に乘つて徐々と足搔を進ませた、彼は危殆に垂とした羅馬を救つたのである。

シンシンナタスが其の當時の一言は法典である、そして如何なる人も全羅馬の主宰權を握つた彼に向ひ、敢て一指だもさす人はない、だから自身王樣とならんと欲したら、其處に何等の反對も故障もなかつた、けれど彼は人民が彼の爲した赫々たる偉勳に對し、未だ充分に感謝をする暇もない内に、倉皇として大權を白髮の元老院議官等に返上し、再び小さな畑の主となつて鋤を握つた。

彼は實に十六日間羅馬の主宰者であつたのである。



## レギュラスの話

羅馬から地中海を隔てた向岸に、嘗てカーセージと名づくる大きな市があつた、羅馬の民は年來此のカーセージの民とは睦まじくなかつたので、遂に兩者の間に戰端が開かれた、其の何れが最後の勝利を占めるといふ事は永い間分らず、先づ羅馬軍が一戰爭に勝ては、次ぎの戰爭にはカーセージ軍が此度は勝つといふ有樣、斯くして戰爭は多年續いたのである。

羅馬軍の中には、レギュラスなる剛勇無雙の名將があつた、――傳わる所によれば、彼は嘗て約束を破つた事はなかつたさうだ、或る時の戰爭である、さしものレギュラスも何した機勢か敵の爲めに捕虜となり、海を越ねてカーゼージに運ばれた、昨日に變はる今日は牢獄に繫がるゝ身の、彼は身體の具合も快くなく、且つ何となく心淋しいので、故郷に殘した妻子の身の上を夢に見た、そして彼は再び彼等

の懐かしい顔を見ることは出來まいと、少なからず心を痛めて暗涙を呑んだ。鬼を
も拉ぐ勇士だとて妻子を思ふ情に變はつた事はない、彼は斯く迄も故郷や妻子を案
じて幽囚の身を嘆いてゐたが、不圖國家といふ考へが頭に浮んで來た時、祖國の前
途を思ふのが第一の義務だといふ自覺が閃いたので、女々しい考へは一切棄てゝし
まひ、再び慘酷なる戰爭に一身の安危を賭せんと決心した。

彼が一戰に敵の爲めに敗らるゝ所となつたのも、牢獄内に監禁せらるゝ身となつ
たのも事實である、然し彼は羅馬軍が着々と有利の地位を占め、カーセージ軍は最
後の勝利の收むべからざるを知つて、瀕に恐怖しつゝある事實を洞察した、果して
彼が先見の明過たず、其の頃よりカーセージ軍は使を近隣の諸國に派し、軍隊の勢
力を大ならしめんが爲め傭兵のことに肺肝を摧いたが、然し是等の傭兵を以てして
も、彼等は到底永く羅馬軍と戰ふことは出來なかつた。

一日カーセージの役人達がレギュラスを牢獄に訪れて、



『我々は羅馬の民と和親を調停したいと思ふが、貴下の本國の爲政者でも、若し貴
國の軍隊が如何なる戰況にあるかと御存知の上からは、必らず又喜んで平和に局
を結ばるゝに相違ない、若し貴下が我々の申す條件に御破約なくば、貴下を自由
の身として國にお歸へし爲ても宜しい。』

『貴官等の御約束とは如何なる事で御座るか？』

『先づ第一に……。』

と役人の一人は嚴かに、

『貴下は此度の戰爭に於ける貴國軍隊の敗北を告げて、其の何等の得る所もなかつ
たことを語らねばならぬ、第二には貴國政府が萬一にも和親調停を欲せなかつた
塲合には、貴下は再び來つて此の牢獄内の人となると誓つて貰ひたい。』

『宜しい、本國政府が和親調停を欲せなかつた塲合には、拙者は必らず此の牢獄内
に歸り來ることをお誓ひ致す。』

斯くして彼等は囚はれたる虎を野に放つて、彼の本國に使命を齎らしめた、何となれば大羅馬人レギュラスは、必らず約束を守るの人だと敵ながらも傳え知つてゐたからである。

レギュラスの羅馬に歸つた時、總ての人民は好將軍歸り來れりと喜んで彼を迎へた、夢路にも忘れぬ我が父歸れり、我が良人戻り給へりと感涙にくれた彼が妻子は、再び別離の悲しみを見る事はあるまいと安心した、市の立法者なる白髮の元老院議官等は、親しくレギュラスの許に來て戰況を尋ねた。

『予は本國政府に和親調停の意志あるや否やを問ふ爲め、カーセージより使命を齎して戻りました。』

とレギュラスは決心の色を面に浮べて、

『然れども拙者の考へる所に依れば、今カーセージと和を結ぶは當を得たものでありません、成程、予は不幸にも二三の小戰に敗れましたが、我が軍隊が徐々に有



勢に赴きつゝあるのは事實でありますのみならず、カーセージの民等は、其の最後の勝利の遂に收むべからざるを知つて此の先の戰爭を悲觀して居ります、又悲觀するのは至當の事だと存じます、故に本國にして今少しの間戰爭を繼續してゐましたら、近き將來に於てカーセージは我が手に歸すると思ひます、又予の一身上に關しては、予の妻、予の兒及び羅馬に永遠の別離を述べんが爲めに歸つて來たのであります、予は明朝速かにカーセージに戻り、約束を履行する爲め再び牢獄中の人となります。』

元老院議官等は彼を其の儘本國に止めておかうと思ひ、百方利害を說いた未、

『では、將軍の代りに他の者を送るとしやう。』

と迄言つて見たが、レギュラスは決然として、

『羅馬の民は約束を守らないで宣いでしやうか？　殊に予は病身で、餘生も永くはないと思つてゐます、約束通り私は斷然歸ります。』

彼の妻や幼なき子供等は最前のが夢が現在のが現か、忽ち變はつた悲しみに泣きの涙であつた、稍大きな子供等は父の袖に縋つて、本國に此の儘止まつて呉れと半狂亂になつて願つたが、

『否最早約束した事ぢや、後の事は世話の仕手もあらう。』

とレギュラスは一言を殘した儘、皆の者に涙一滴見せず別れを告げ、潔ぎよく又海を越ゐて牢獄に歸つたが、彼の期せしが如く慘酷なる死に就いた。

これ實に羅馬をして、後に世界に誇る最大强都とならしめた武勇譚の一つである。

（220）

**コルネリアの寶石**

少年文藝

# 世界お伽袋 終


明治四十四年四月一日印刷
明治四十四年四月五日發行

不許複製

お伽研究會編

東京市下谷區仲徒町一丁目六番地　發行者　關由藏
東京市淺草區南元町二十八番地　發行者　鈴木與八
東京市京橋區南小田原町三丁目十三番地　印刷者　今井鐵次郎
東京市京橋區南小田原町三丁目十三番地　印刷所　今井印刷所
東京市淺草區南元町二十八番地　發賣所　盛陽堂
東京市下谷區仲徒町一丁目六番地　盛由閣

（定價金參拾錢）
お伽袋奥附

264
836